

■第2回 ル・コルビュジエとはだれか—その原理性と革新性をめぐって

松隈 洋

- 1887 シャルル=エドゥアール=ジャンヌレ(後にル・コルビュジエ)は10月6日、スイス・ジュラ地方ラ・ショー=ド=フォンで生まれる。父は時計の文字板職人、母はピアノ教師。兄アルベールは後に作曲家として世に出る。
- 1902 彫金工を志し地元の実術学校に入学。先生の画家レプラトニエの感化で建築に向かう。ラスキンやニーチェの著作を受読。
- 1906 初めて住宅「ファレ邸」を建設。
- 1907 フィレンツェ、シエナ、ラヴェンナ、パダヴェストなどを旅行。その後、ウィーンに滞在。ヨーゼフ・ホフマンに会い、ユークゲンシュティール、分離派などの潮流に触れる。
- 1908 ウィーンを発ちミュンヘンなどを経てパリを訪れ、オーギュスト=ペレの下で15か月働く。ペレ、同郷の構造エンジニアのマックス=デュボアらに刺激され、鉄筋コンクリートに関心高まる。
- 1909 帰郷して美術学校の学友と連合アトリエを結成。
- 1910 美術学校から派遣されてミュンヘンでドイツ工作連盟と接触。ベルリンのペーター=ペーレンスの下で5か月間働く。
- 1911 6か月間の東方旅行に出発。中・東欧を経てバルカン半島からギリシャ、イタリアへ巡る。イスタンブール、アトス山、アクロポリスの感動を胸に帰郷。
- 1912 ラ=ショー=ド=フォンの美術学校の新設科で教鞭をとるとともに建築事務所をひらく。
- 1914 裝飾美術学校新設科の廃止で教師を辞す。ケルンのドイツ工作連盟展見学。ドミノの開発に着手。
- 1915 ドミノの特許取得のためパリをしばしば訪れ、合間に国立図書館で都市計画の資料をあさる。
- 1917 シュワブ邸の建設費がかさみ訴訟になる。夏、故郷を去ってパリへ。バリ=ジャコフ街のアパートの屋根裏部屋を住居兼アトリエにして定住。
- 1918 旧友のついで土木会社のコンサルタントをつとめ、かたわら建材工場を経営して苦闘。網膜剝離で左眼失明。この頃より、後にハトロンとなるスイスの銀行家ラ=ロシュと交際。ペレに紹介されてアメデ=オザンファンと親交、勧められて絵画を描き始める。オザンファンに協力してキュビズムの批判的継承を旨とするピュリスムを宣言。
- 1920 詩人ポール=デルメ、オザンファンとともに『エスプリ=ヌーヴォー』誌を創刊。『エスプリ=ヌーヴォー』誌創刊号の記事に初めて「ル・コルビュジエ」と署名。フルナン・レジエと出会い交友。アドルフ=ロース著「裝飾と罪悪」の仏訳を『エスプリ=ヌーヴォー』誌に掲載。
- 1921 建材工場倒産。軍需物資のプロカーなどで生計をつなぐ。ラ=ロシュのために近代絵画を収集。この頃、将来伴侶となるファッション=モデル、イヴォンヌ=ガリと出会う。
- 1922 ペレの下にいた徒弟ビエール=ジャンヌレと協同で建築事務所設立。以後1940年までの全建築作品に、ル・コルビュジエとP.ジャンヌレが連署される。サロン=ドートンヌに建築=都市計画案出品。
- 1923 パリで開かれたドゥースブルパールの新造形主義建築3人展を観る。バリ=オートイユに「ラ=ロシュ=ジャンヌレ邸」(現ル・コルビュジエ財団本部)竣工。
→ ペレとの「意論争」が『バリ=ジャーナル』誌上を賑わす。
- 1924 事務所をセーヴル街35番地に移し、住まいはアヌル街へ。ジュネーヴ、ローザンヌ、ブラハで講演。
- 1925 『エスプリ=ヌーヴォー』誌28号で廃刊。オザンファンと訣別。国際裝飾美術博覧会(アール=デコ博)で集合住宅の住居単位型モデル「エスプリ=ヌーヴォー館」をつくる。
- 1926 父エドゥアール逝く。この頃、「新建築の5つの要点」を定式化。
- 1927 国際連盟コンペに応募。1位に入賞するも実施を託されず。ドイツ工作連盟主催のシュトゥットガルトのヴァイセンホーフにおけるジードルンク新住宅展に招待参加。住宅2館を建てる。シャルロット=ベリアンが協力者となる。
- 1928 「住居と宮殿」を著し、国際連盟コンペでのスキヤンダルを公表して批判。ドマンドロー夫人の支援を得て、ギーティオンらとラ=サテでCIAM(現代建築国際会議)第1回会議を開催。以降第9回まで毎回出席。モスクワのセントロウコース招待コンペで入賞し実施へ。モスクワ、ブラハなどで講演。絵のサインにル・コルビュジエの名前を用い始める。
- 1929 ペリアンと家具を共同制作。サロン=ドートンヌに出展。「ル・コルビュジエ全作品集」第1巻(1910-29)刊行。初めて南米に渡航し、ブエノスアイレスからモンテビデオ、リオを訪れて「フレーション」の題で講演。帰途の客船上で、ショー=ダンサーのジョセフィン=バーカーと出会う。アルジェに旅行。
- 1930 フランス市民権取得。イヴォンヌ=ガリと正式結婚。モスクワ、スペインを旅行。
- 1931 ソヴィエト=パルスの招待コンペに応募するが、入選を逃す。この頃より、サンディカリズムに接近。「アルジェの友」の後援でアルジェで講演。カスバを訪れる。アルジェの都市計画に着手。P.ジャンヌレとスペイン、モロッコを自動車旅行、アルジェを経て帰国。
- 1932 パリ大学都市のスイス学生会館に写真壁画を制作。
- 1933 自身で設計のポルト=モリトルのアパートが完成。
- 1934 ローマでムッソリーニに接触はかる。トリノのフィアット工場を見学。ミラノ、バルセロナなどで講演。ヴェネツィアで「都市と国家」のシンポジウムに参加。アルジェ、ガルダニアを頻繁に訪れる。M.d.ゼンガーに「共産主義者のトロイの木馬=ル・コルビュジエ」と批判される。
- 1935 ヴェズレーの住宅で初めて壁画を制作。自身のアトリエでプリミティブ=アール展を開催。ニューヨーク近代美術館とN.ロックフェラーの招きで米国初訪問。
- 1936 米国各地の大学で講演。リオでオスカー=ニーマイヤー、ルチオ=コスタらとブラジル保健教育省の建築計画を協議。パリでアラゴン、レジエと「リアリズム論争」で開談。
- 1937 バリ万国博に「新時代館」建設。アルジェに地方計画委員に就く。V.クチュエリ記念碑コンクールに応募。
- 1938 カブ=マルタンのアイリーン=グレーの家に壁画を制作。
- 1940 戦災者用に粘土と木の枝による避難施設建設システム(ミュロンダン住宅)を構想。国防省発注の「緑の工場」の実現のためオービュッソンに滞在在中、ドイツ軍パリ占領の報。

- 妻とP.ジャンヌをともない、ビレネーの籍オゾンへ向かう。
まもなくP.ジャンヌはグルノーブルに去ってレジスタンスに参加。
- 1941 ヴィシーに長期逗留、ヴィシー政府首班ベタン元帥に接見、住宅と建設に関する委員に任じられる。
サンディカリストのF.d.ピエールフワと投合。
アルジュ計画の折衝で現地を2回訪れる。
D.v.ウィルヌーヴ男爵夫人と「アテネ憲章」の決定稿を脱稿。
- 1942 1931年以来積み重ねてきたアルジェの都市計画の最後の提案(「プラン・ディレクトゥール」)をまとめる。
CIAMのフランス支部メンバーを糾合してASCORAL(建築刷新のための建設者会議)を設立。
- 1943 建築物標準化国家委員会のメンバーから漏れて憤慨、ASCORALの仲間らとモデュロールの研究に着手。
- 1944 ヴィシー政府に石油産地の小都市サン・ゴダンの整備を中心にビレネー地方の都市計画について報告。
パリへ戻って絵画とモデュロール研究に専念する中で、パリ解放される。
家具職人出身で後に仏政府復興相となるクラウディウス・ブティと出会う。
- 1945 ATBAT(建設者のアドリエ)を創立。
ラ・ロシエール＝バリス地方の主任都市計画家に任じられる。サン・ディエでも復興計画を担当。
復興相R.ドートリからマルセイユに(ユニテ・ダビタシオン)の建設を依頼される。
米国の建築都市計画事情調査のため公式派遣団長に任じられ、C.ブティらと渡米。
- 1946 一旦帰仏するが、国連常設本部委員会仏代表に選ばれて再び渡米、国連本部の敷地選定にある。
プリンストンでA.アインシュタインと出会い、モデュロールの研究について助言を得る。
マンハッタンに超高層ビルを建てて国連本部とするよう進言。
- 1947 帰仏して国連本部建築計画を構想、国連からの建築計画専門委員就任要請を待ち構えて渡米。ル・コルビュジエ案をベースに構想は具体化されるが、設計は委嘱されず失望。
「都市計画におけるCIAMグリッド」を提案。モデュロールの特許を申請。
家具職人J.サヴィナの協力を得て、初めての彫刻作品を完成。詩画集「直角の詩」の制作に着手。
- 1948 モデュロール研究完了。ミラノ、ニューヨークなどで講演。米国各地で個展開催。
パリ大学都市のスイス学生会館に、錬金術の主題による壁画を制作。
最初のタビスリーを制作。
- 1950 大戦で壊れた礼拝堂の再建を依頼されてロンシャンを訪れる。
インド・パンジャブ州政府高官の来訪を受ける。この頃より、コラーージュの制作に傾倒。
- 1951 チャンディガールの建築顧問を受諾しインドに赴く。
ユネスコ本部の設計者に推されるも米国代表の異議で、建設を監督する5人委員会の委員に留まる。
- 1952 インドからの帰途、エジプトに寄りガサなどを観る。
ラ・トゥーレットの修道院のスタディのために現地を訪れる。
マルセイユの(ユニテ・ダビタシオン)竣工。
カブ・マルタンにモデュロール寸法の小屋をつくる。
- 1955 ロンシャンの礼拝堂(ノートルダム・デュ・オー)竣工。
東京の国立西洋美術館の設計のために日本を訪れる。
- 1956 チャンディガール高等裁判所竣工式に出席、帰途バグダッドで講演、フィルムミの一連の施設計画を受注。
- 1957 妻イヴォンヌ逝く。行年65歳。
- 1958 ブリュッセル万博フィリップス館の建設を依頼され、音と画像と空間による「電子の詩」を着想。
- 1959 ハーヴァード大学からカーベーター視覚芸術センターの設計を依頼され渡米。
- 1960 母ベレ100歳で逝く。
- 1961 パリ・オルセー駅跡再利用コンペに応募するも主催者に取り消される。
東京の国立西洋美術館で日本初のル・コルビュジエ個展開く。
- 1962 パリで大回顧展開く。
- 1965 8月27日カブ・マルタンの浜で水泳中に心臓麻痺で逝去、行年77歳。
ルーヴル宮クール・カレで国葬、葬儀委員長アンドレ・マルロー仏文化相。

- ・「我々は新しき慣習を採用し、我々は新しき倫理を希求し、我々は新しき美学を探索する。このための根拠はいかなるものか？ 我々には一つのみある。それは人間。理性と情熱——精神と魂——を持つ人間。そして建築という問題においては、自身の寸法尺度を持つ人間。」
- ・「アカデミー主義とは何か？アカデミー的なものの定義——自分自身では判断しないもの、原因の検討抜きで結果を容認するもの、絶対真理を信じるもの、問題に対し真の「自我」を介入させないもの。我々の当面の問題—建築—都市計画——に関していえば、アカデミー主義とは、そこに存在するからという理由で形態、方法、概念等を含めてしまい、なぜと問うことをしないものであります。」
- 「私は安寧を奪い取られ、絶え間なき危機感にさいなまれた人生に身を置きながらもなおつ「いかに」と問い「なぜ」と探る強い喜びを実際に体験して来たのであります。「いかに」、「なぜ」？
人は私を革命家と決めつけます。ここで正直に告白いたしますが、私は今までに唯一の師しか持ったことがないのです。過去という師です。そして唯一の教育しか受けたことがありません。過去から学び取るということです。」
- ・「私は純粋な作品のあるところにはどこへでも出かけて行きました——農民の作品、天才の作品——そして常に「いかに、なぜ？」という問を前にしていたのです。過去の中に、歴史の教訓をそして事物の存在理由を見出しました。すべての事象、すべての事物は「…との関連において」存在するのであります。」
- ・「技術者の仕事は分析と計算の応用であり、建設家のそれは総合と創造であります。」
- 「新時代の意識が正しく形成される時、エスプリ・ヌーヴォーにより高められ、後退でもなく前進の決意に基づいて克服されて、我々の時代の調和が確立される時、我々が死に捉われるのではなく生の方向へ舵を取ります、その時にこそ建設者が誕生するので。そして現代へ広範に繰り広げられているものが一致して明晰、歡喜、明解へと向かうのです。その時は近いのです。信じていただきたい。その時が来たらあらゆる国で、アルゼンチンでもフランスでも日本でも、時代の開扉を告げる鐘が鳴り響くのです。しかし、まず、あらゆるところで、アカデミーの妖怪が打ち倒さなければなりません。もうアカデミー的に思考してはならないのであります。」
- ・「標準化、工業化、テイラー方式化、これらが情け容赦もなく我々の時代の諸活動を支配していますが、決して残酷で堪え難いものではなく、それどころか秩序、完璧、純粋、そして自由へと導くものなのです。」
- ・「建築、それは採光された床である。」
- ・「鉄筋コンクリートを使うと壁を全面的に排除できるので。床は互いに離れて築かれた細い支持柱の上に設けるのです。（中略）そして支持柱を地面から屹立させます。（中略）地面は手付かずで連続しています。（中略）これで家の下の地面部が自由に使えるようになるのです。」
- ・「地面は住宅の下で解放された、屋上が活用可能になった、ファサードが全面的に解放された、従ってもはや麻痺してはいない。」
- ・「自由な平面、自由なファサード。これが建築にとって意味するのは大いなる解放、石造住宅から偉大なる一歩を踏み出したということ。これは現代という時代のもたらした賜物であるのです。」
- ・「建築は認識された意図に基づく行為であります。建築する、「それは秩序づけること」何を秩序づけるかという、機能と物質、空間に建造物と道路を配すること。人間を保護する容器を造り、そしてそこへ到達するに便利な連結を作ること。地理の巧妙さによりエスプリに作用し、眼に訴えるフォルムと、歩行に課せられる距離によつて感覚に作用すること。鋭敏で、決して逃れることのできない知覚をうまく使つて感動させること。空間、距離とフォルム、内部空間と内部フォルム、内部動線と外部フォルム、そして、外部空間——質量、重量、距離、雰囲気、これらによって我々は設計をするのです。」
- ・「建築的感動を喚起させる基本的諸要素をうまく組み合わせることに、私は情熱の限り専念して来ました。（中略）注意を引き付けかつ空間を力強く占有するために、まず完璧なフォルムの基本要素が必要でした。次にこの面に行くつかの突出部あるいは有孔部を設け、前—後の運動性を加味し、平面のつまらなさを高揚したものにえます。次に窓の開口より（窓の開口部は建築作品の読み取りの基本要素です）建築のリズム、距離、時間を導入することにより副次的な各面の組合せというなかなか大変な仕事が行われるのです。建築のリズム、距離、時間を屋外に、そして屋内に。」
- 「中に入る、そこで衝撃を受ける。これが基本的感動です。ある大きさの部屋が別のある大きさの部屋に続いている、あるフォルムの部屋が別のあるフォルムに続いている。これにより感銘を受ける。これこそ建築であるのです。そして、ある部屋に入る時の入り方、つまり壁のどこで扉が配置されているかということによりそれぞれ受ける衝撃は異なるのです。これこそ建築であるのです。
ところで、建築的衝撃のどのように受け取られるのでしょうか？ それは知覚される対比の効果によるのです。この対比は何によって創られるのでしょうか？ 事物、目に映る各面によってであり、目に映るということこそそれらに光が当たっているからなのです。その上、太陽の光は人間の素質そのものに根ざした影響力をもつて人間という動物に作用するのです。ですから、窓の開口位置の重要性を理解しなければなりません。光が部屋の壁のどの部分かという点を考慮しなければなりません。ここにこそ建築というものの大部分があり、建築の決定的印象はここ由来するのです。もう様式や装飾の問題ではないということが良くお分かりでしょう。（中略）さきさまのフォルムの上に光は当たり、それだけが独自の明るさに輝く、そしてそれぞれのヴォリュームが重なり合い我々の感覚に作用し、感音的かつ生理的感動を喚起するのです。」
- ・「建築の探求に乗り出し、我々は単純の領域に到達いたしました。偉大な芸術は単純な手段で出来ているのです。（中略）エスプリは単純へ傾くものであることを歴史が証明しています。単純は、判断のそして選択の成果であるのです。つまり腕の深さの表徴であるのです。複雑から myself を離すことにより、意識の状態を表明し得る方法を見つけて出るので。ある精神的体系はフォルムによる明確な表明せにより表明されるのです。確認の如きものです。混乱から幾何学的明晰への歩み。」
- ・「このように単純は貧弱とは異なるのです。それどころか単純は選択であり選別であり、純粋性を目標とした結晶化であるのです。単純は産集であるのです。」

○「…、というのは、建築としての耐久性を保証し、その居住性を満たすことに専念する精神活動が、単なる実用本位を超えて、われわれに生氣と歡喜をもたらす詩的な潜在力の表現を目指すという、一連の創造過程に現出する否定すべくもない事象こそ、建築と呼ばれているものだ」

・「我々は工業時代以前の方式の建築を一掃することになります。建築工事は悪天候下では身動きのできない季節に依存した作業ではなくなるのです。我々は「乾式住宅」に到達します。これは、自動車の手車の如く機械主義より完璧に工場生産された部品を、現場で建方工が組み立てるのであり、もう石工や大工や板金工、屋根葺き職人、左官、建具工、電気工等々の大袈裟な職人群は不要なのです。」

・「1914年にフランドル地方において第1次世界大戦の最初の戦禍が起きた際、私は現代住宅問題の予知的な発想の如きものを得たのです。(中略)これが1914年の案で「ドミノ」住宅と命名されたものです。(中略)成る請負業者が住宅の骨組を(仮組を使うのではなく精巧に作られた現場材料を利用して)打設します。この骨組は6本の支柱と3層の床板と階段から成っています。その寸法は6m×9m。規格化された柱は4メートルの規格スパンで、両側には1メートルの片持スラブの張出しが出ています。(中略)躯体が請負業者により打設された後、罹災者は廢墟の焼け残りの材料を使用し、自身で思い通りに住宅を造り上げることになるのです。(中略)これは実に斬新なことでありました。石工が造っておいた穴に扉や窓をはめ込むというのではないのですから。話は全く逆で、規格化された天井高や柱間寸法の恩恵により、扉、窓、戸棚が簡単に取り付けられるのです。そしてこれらの要素が設置された後に回りに壁を設ける、つまり塞げば良いのです。ここに、規格躯体を持ち、自由な内部平面計画の可能な大量工業生産住宅の命題が完全な形で呈示されていたに実現するには15年も待たねばならなかったのです。我々は他の多くの問題に没頭してこのことにはっきりと気づいていなかったのです。」

・「人間の尺度の住戸」の探求と私が呼ぶことは、既存の住宅、既存の住宅法規、すべての慣習や伝統を忘れるということであるのです。我々の生活が置かれている新しい状況を冷静に検討することなのです。分析することを恐れず、総合することを知る。己の背後に現代技術の支援を感じ、己の前面に假知ある解決策へ向かう建造物の宿命の進歩を感じることもなのです。機械時代の人間の心を満たすことなのです。「古い屋根」を頂けるえせ詩人たちをちやほやすることではないのです。彼らは何も気づかずにリュートを手にして民族の衰微や、都市の絶望や、国家の醜態を眺めいられる人々なのですから。」

・「家具とは一体何でしょうか」「我々が社会的地位を示すための手段。」こういうのは君主的な考え方です。太陽王ルイ14世は、これをうまくやり遂げました。我々はルイ14世になれるでしょうか(中略)真面目に、心から、我々は太陽王になりたがっているのでしょうか?

家具、それは—
仕事をし、食事をするための机、食事をし、仕事をするための椅子、いろんな形で休息をするためのいろんな形の安楽椅子、そして、我々の使用物を収納する戸棚。家具、それは道具です。」

・「大きなノルマンディ風衣装筆筒、そして何とか様式の整理筆筒。これらは全く効率の悪い整理しかできないのです。使い勝手が悪く、部屋を狭くします。こういう場所過ぎる家具は、城館や田舎の大きな館の部屋でだったらよろしいが、現代住宅では誠に災難です。(中略)

椅子と机を別にするれば、家具は本当のところ戸棚だけなのです。(中略)従来家具は、結局のところ美的意味しか果たさせません。ところで、ある道具が最早、機能を果たして、美的という存在理由しかないとしたら、それは邪魔物になったものであり、捨てるものであるのです。我々に適合した美的フォルムをどこに求めるのか考えて見ましょう。現代人の魂を、感性を満たし得るものが何かを探し求めてみましょう。」

・「事務所であろうと居間であろうと、配膳室であろうと、ブードアであろうと、いつでも、どこでも、規格化された正確な機能がつくり上げられ、そして満たされているのです。人間の寸法、つまり共通の寸法で諸物を秩序化するのです。古えの大筆筒よさらば!」

・「椅子は休息するためのものである。」

・「家具の観念は消滅してしまいました。新しい言葉に置き換えられたのです。つまり、「屋内設備」になったのです。」

以上『プレジジョン(上)』1930年

・「もし現代住宅の平面計画の諸解決策を、発見しようと努力するならば、我々には今や、見出し得るだけの手段が与えられています。石造家屋の「麻痺した平面」を思い起こしていただきたいのです。そして、鉄骨あるいは鉄筋コンクリート造の住宅で、我々が到達したことを、すなわち—
自由な平面構成、自由な立面構成、独立した骨格構成、水平連続窓、あるいは、ガラス壁面、ピロティ、屋上庭園、そして、「収納棚」を設備し、場所過ぎる家具を排除した内部。」

○「建築とは分析から総合へと至る一連の諸事象の連鎖であります。」

・「建築とは、機能であり、その機能により人間のさまざまな営みを包含する有効な器が建造されるのです。この危機の時、伝統的な器では現代世界の新しい諸機能を包含するには適合しないということを経験は一例に示してくれるのです。(中略)この確かな事実こそ、新時代が我々を促したことに、人間の歴史の1ページが繰られたこと、そして我々の目前には現代的使命が山積していることを示してくれるものなのです。ですから、我々の決断が不可欠であり、もう怠惰や偽りの感傷の犯罪的な術策によって誤った道へ導かれてはならないのです。建築は機械時代の進化的道を雄弁に具現化するのです。」

以上『プレジジョン(下)』1930年

- ・「建築家は、形を整頓するという彼の精神の純粋な創造によって秩序を実現し、形を通じて、われわれの感覚に強く訴え、造形的な感動を起こさしめる。そこに生み出された比例によって、われわれに深い共鳴を自覚させ、世界のそれと和しているかと感じられる秩序の韻律を与え、われわれの情や心のさまざまな動きを確定する。その時、われわれは美を感じるのだ。」
- ・「建築とは芸術的な事実、感動を起す現象、構築の問題の外、それを越えた所にある。構築は、「これないようにする」ことだ。建築は、「感動を与える」ためだ。建築的な感動とは、作品のひびきが、われわれが支配をうけ、それを認め、それを讃えている宇宙の法則の音叉をあなたの方の中でならす時である。ある一定の比例が違えられると、われわれはその作品のとりこになる。建築とは〈比例〉であり、それは「精神の純粋な創作物」である。」
- ・「建築は「何々様式」とは何の関係もない。ルイ15、16、17世紀様式とか、ゴシック様式とかは、建築にとって、婦人の顔に飾る羽毛のようなものだ。それは時には綺麗かも知れないが、いつでもというわけにはゆかず、またそれ以上のものではない。建築にはもっと厳粛な使命がある。崇高といえるもの、その客観性を通じて本能の一番もとに触れることだ。その抽象性そのものからもっとも崇高な能力を喚起することだ。」
- ・「建築的抽象は、次のような特異性と素晴らしさを持っている。すなわち生身なところに根源を持ちながら、それを精神的なものに高めることだ。生身な事実というものは投影する秩序によってしか考えとてままりはない。立体と面とは建築を表明する要素である。立体も面も平面によって決定される。平面が原動力である。」
- ・「鉄筋コンクリートの構造は、建物の美に革命をもたらした。鉄筋コンクリートは屋根を排除して、その代わりにテラスを置き、今まで知られなかった新しい美へ導く。凹角、入隅は可能であるし、これから隆やうす明りの演出は、上から下へではなく、左から右に横に組合される。これはプランの美学上重要な変更である。(中略)われわれは、新しい社会的経済的条件にもう一度適合させて建設する時代に当面している。われわれは脚を通り過ぎつつあり、伝統の大系譜につながる途を再び見いだすためには新しい視界として、今日行われて入るいろいろな手段の全面的な再検討と、論理的に設定された新しい建設の基盤を決定しなければならない。建築において、古い構造の基盤は死んでしまった。全建築活動の論理的な支持を得た新しい基盤がなければ建築の真値を見出し得まい。この基盤をつくるための努力に20年は要するだろう。それは大課題の時代、分析と実験の時代だ。それはまた美学の大転換の時代でもあり、新しい美学をつくり出す時代でもある。その進化の鍵はプランを研究しなくてはならぬ。」
- ・「地盤の高い大都市で、建物の基礎として膨大な石積みを未だに見ることがある。実は簡単なコンクリートの柱で同じだけの効果が上げ得るのに。屋根が、未だに用いられている。許せない矛盾。地下はしめっぽく、混雑している。都市の配管はいつも死んだ臓器のように土石の下に埋められている。しかるに今すぐにも実現可能な合理的な構想が、これらを解決してくるはずなのだ。」
- ・「一つの家は住むための機械である。風呂、太陽、湯、冷水、好みどおりの温度、食品の貯蔵、衛生、美と比例。」

- ・「建築は標準の上に働きかける。標準は理性的ものだ。分析の、綿密な研究のものだ。標準はよく設定された課題の上につくり上げられる。建築は造形的な発明であり、知的な開発である。高級な数字である。建築はたいへん威厳のある芸術である。」

○「建築とは、自然の材料を用いて、感動させるような比例を設定することである。」

- ・「平面は内から外に向う。外部は一つの内部の結末である。」

- ・「建築の要素は、光とかげ、壁体と空間とである。」

○「平面をつくるということとは、考えを明確に決定することだ。それはいろいろな考えをもたということだ。それは考えを整理して、わかりやすい、実現可能な、伝達可能な形にすることだ。」

- ・「壁は光りて輝いていたり、かげの中に、またはかげになって、愉快にしたり、平静にさせたり、悲しくさせたりする。交響曲がここに組上げられる。建築はあなたを愉快にしたり、平静にしてりする目的がある。壁を尊重してください。」

以上『建築をめざして』1923年

- ・「今日、巨大な社会的・工業的な力が世界中に沸きわたつが見られる。この騒々しさの中から整然とした論理的な願望が現われ、それらが、われわれのもつ実現手段と一致するのが感じられる。新しい形が生まれ、世界が新しい態度を創り出す。(中略)新しい時代が始まり、新しい事が起こるのだ。そして初めに、人間は住居と都市を必要とする。住居と都市は、新しい精神、現代の感情——あらゆる抑制を越えて溢れて不可逆だが、われわれの祖先の運々とした仕事の結果である力から生ずる。それは、最も困難な努力、最も合理的な探究から生まれる感情であり、「明晰な概念に導かれる構成と統合の精神」である。」

以上『ユルバニスム』1924年

- ・「ある地方に固有の素材、その時代の装備に固有の施工、その時代の文化に固有な精神傾向などを駆使して建築は首尾一貫した配列のシステムを創出するが、そのシステムは純化され完成された有機体であり、静的で美的な結果を生む自発的活動を内包するとともに、不可分な生理的、精神的興奮の誘起者でもある正確な改ざん不可能で重要な一つの個体、一つの存在なのである。建築は時代を経て、「純粋なシステム」を遺した。」

- ・「システムはそのシステムの効果を住宅から寺院にまで拡げる。」

- ・「装飾はそのシステム外にある。建築はこの装飾以前の全体である。」

- 「一個の人間が行なう最初のこと、それは彼の面前に直角を構築し、整理し、秩序づけ、彼の面前を明晰に理解することです。人間は、直交する3本の軸線上の座標によって空間を計測する方式を発見しました。この秩序づけの現象は、それについて語る必要があることには驚くかも知れないほど、人間にとって本有のものであります。」
- 「現代の建築は、当たり前でありふれた人間のための平凡でありふれた住宅に専心します。宮殿建築には留意しません。ありふれた人間、「誰彼かまわず」のために住宅を研究する、これが人間の基盤、人間の尺度、要求——標準型、機能——標準型、感情——標準型を再発見することなのです。」
- 「付け加えるものは何もなく、すべてが内にある。建築は付け加わりはしないのだ。建築は、住宅の様々な物の集合に印された秩序の固有な質の中に在る。(中略) 建築の力(建築の潜勢力)は住宅の様々な構成要素の集合における秩序を決定する精神の内に積分されるものであり、建築は発現するものであって、着物を着るものではなく、布というよりはむしろ匂い、包み込む面というよりむしろ集合の状態であろうと考えている」

以上「エスプリ・ヌヴォー」〔近代建築名鑑〕1926年

- 「建物としての耐久性を保証し、その居住性を満たすことに専念する精神活動が、単なる実用本位を超えて、われわれに気と歓喜をもたらす詩的な潜在力の表現を目指すという、一連の創造過程に現出する否定すべくもない事象こそ、建築と呼ばれているものだ」
- ①「建築するとは秩序づけることである。」
- 「私はこの数年來、現代様式の確立のために、著名な同僚とて共同研究を進めて来た。そして成る日、私は盡いておいたことがある。この困難な時代に幸いあれ、われわれから遂に宮殿を剥奪し、われわれに住宅の問題に従事させた戦後の貧しさに幸いあれと。(中略)われわれが気づいたのは、住宅を建設するということが、柱を立て、間仕切り壁を設け、立面全体に開口部を配分する、ということである。そしてそれは、内部にあっては、われわれに電撃的な作用を与える程の継ぎ的な空間を秩序づけることである。」
- 「われわれは過去に支えられて来た、というのは、過去がわれわれに教えるところによれば、明晰さと永続的な均衡の条件の下で、住宅は型となり、この型が純粋であれば、それは、建築的なポテンシャルと、真の建築の宝庫を有するからである。」

以上「住宅と宮殿」1928年

- 「窓はいつも障害だった。時代を追ってその変遷を見れば、そのからくりの向上が見られる。進歩のあるたびに解放がもたらされる。鉄筋コンクリートは、窓の歴史に革命を起こさせた。」
- 「窓をひとつの機構と考える。自動的な移動と気密性。機械的な窓を備えること。私たち建築家は、一定の規格で満足する。その規格で構成するのだ。」
- 「これからの窓は部屋の中に向かって内開きで邪魔にならったり、外開きではいけない。横に滑るようにしなければいけない。」
- 「この同じのつくった邸宅も、独立住宅も、労働者住宅のすべても、共同住宅のすべても、この同じ型の窓で考えてつくられた。私たちはこの数年で、その規格を人間中心につめることができた。(中略)窓は住宅の機械部品の代表である。」
- 「私たちは、美しい比例の宝石のように滑らかにまとめられた家を夢想いたしました。(中略)私たちは、この国でも外国でも流行している複雑にゴタゴタした家には反対です。私どもは部分よりは全体の統一の方が強いと考えます。この滑らかな息を急げ心の仕業とおとりにならないで下さい。その反対でした、良いことかけて熟した間取りの結果なのです。単純さとはやさしいということではありません。(中略)私たちは内蔵は内にしまい、よく分類、配置して、澄み切った明快な姿だけが外にあるようにしました。これはそう易しいことではありません。本当にそこに建築の難しさがあるのです。(中略)構造と間取りが大変簡単になっていますから、建設業者は高いことはいわないでしょう。これは大切なことです。」
- 「ある日、住宅も自動車のようにあり得ると気がついた。単純な包皮、その中に自由に無数の機構が内蔵できると。」
- 「私たちの方法の幅広さは、全体へ広げられて、明快な事象の評価へと走らせる。個性という、熟の作用による特別例よりも凡俗の、平均的な規則的なものを、好みとする。平均的なもの、規則的なもの、平均的な規則が、進歩のため、美しいものへの道としての作戦の基礎と思う。普通の美しさにひかれ、英雄的美しさは舞台のできごとと思われる。私たちはワグナーよりもバッハを、カテドラルよりもバルテノンの精神を好むのだ。私たちは解決策を大切に、偉大で劇的であろうとも、発育不全を心配する。」
- 「建築はその立面の姿を考えるだけではなく、その適切な配置を選ぶこともある。」
- 「柱が独立していることが、家の中全体に一定の尺度とリズムと落ちついた抑揚を与える。外壁は光を選び込むものと考えた。それはひとつも大地に支えられていない。むしろ張り出した床から吊つてあるのだ。従って外壁はもはや床を支えたり、屋根を支えたりはしていない。単にガラスの膜か、家を包む組ものである。」
- 「豊かさの印象は材料の豪華さから与えられるのではなく、単に内部の按配の仕方とその比例寸法にある。」
- 「屋上に庭園をつくることで、夏のコンクリートの床板を膨張から守る。冬は寒さを防いでくれる。庭園は陸屋根への理論的な補助要素である。」

以上「ル・コルビュジェ全作品集」1巻 1929年

・「現代建築の重大問題は、材料の賢明な選択にある。事実、新しい建築的空間が新しい技術によって、新しい造型感覚に従わせながら定められる一方で、簡明で独特の質を材料の固有の価値で生み出せる。」

・「住宅建築は標準部材を用いることで、安定した時代にはいつもあった基本的な態度を取り戻せる。」

以上『ル・コルビュジエ全作品集』3巻 1938年

・「問題は複雑さを単純さに到達せしめることにあるのだ。」

以上『ル・コルビュジエ全作品集』6巻 1957年

・「私は77歳だ。そして私の気持ちはこうだと言える。人生では何かをすることだ。いいかえれば、謙虚に、几帳面に、簡明に行為することだ。芸術的創作のためのあり方は規則正しく繰り返すこと、謙遜、持続性、辛抱強いことだ。私は既にどこかに書いたと思うが、人生の定義は心変わりしないことにある。心変わりしないことは自然で裏り多いからだ。いつも同じであるためには謙虚でなければならず、辛抱強くなければならない。それは勇気、自制力のあることの証拠だし、生存のあり方の呼称といえる。」／「人の心ほど伝えられないものはない」（死の1月前に書かれた文章）

以上『ル・コルビュジエ全作品集』8巻 1970年

・「建築家としての私の作品に何らかの意味があるとしたら、その最も重要なものは人目につかない長く苦しいその過程にあると考えていただきたい」1948年

以上 W.ボジガー編『ル・コルビュジエ』1972年

■参考文献

- 1: ル・コルビュジエ著／前川國男訳『今日の裝飾芸術』（鹿島出版会SD選書）
- 2: ル・コルビュジエ著／吉阪隆正訳『建築をめざして』（同上）
- 3: ル・コルビュジエ著／樋口清訳『ユルバニスム』（同上）
- 4: ル・コルビュジエ著／井田安弘・芝俣共訳『プレジジョン(上)・(下)』（同上）
- 5: ル・コルビュジエ著／山口知之訳『エスプリ・ヌーヴォー』（同上）
- 6: ル・コルビュジエ著／井田安弘訳『住宅と宮殿』（同上）
- 7: ル・コルビュジエ著／森田一敏訳『小さな家』（集文社）
- 8: 『ル・コルビュジエ全作品集』全8巻／吉阪隆正訳（A. D. A. EDITA Tokyo）
- 9: C. ジェンクス著／佐々木宏訳『ル・コルビュジエ』（鹿島出版会SD選書）
- 10: S. V. モース著／住野天平訳『ル・コルビュジエの生涯』（彰国社）
- 11: W. J. R. カーティス／中村研一訳『ル・コルビュジエ—理念と形態』（鹿島出版会）
- 12: 高階秀爾＋鈴木博之＋三宅理一＋太田泰人編『ル・コルビュジエと日本』（同上）
- 13: M. ムスタファヴィ、D. レザポロー著／黒石いずみ訳『時間のなかの建築』（同上）
- 14: 吉阪隆正著『ル・コルビュジエと私』（吉阪隆正集 8 勁草書房）
- 15: 松隈 洋『ル・コルビュジエと日本、そして国立西洋美術館プロジェクト』『建築文化』1996年10月号（彰国社）所収
- 16: 松隈 洋『神奈川県立鎌倉近代美術館 近代建築精神の遺産』『再読／日本のモダンアーキテクチャー』（彰国社）所収
- 17: 松隈 洋『大学セミナーハウス ヴァナキュラー・モダニズムの可能性』同上



北田英治写真展 ル・コルビュジェのインド

KITADA Eiji: Exhibition
Le Corbusier, Finding India
2006.3.7 Tue - 4.14 Fri

ル・コルビュジェを自由にした大地

松隈 洋(京都工芸繊維大学助教授)

20世紀に世界的なスケールで展開されたモダニズム建築と呼ばれる潮流の中で、もっとも重要な建築家と言われるル・コルビュジェは、その晩年にインドと出会うことによって、何を発見し、どこへ向かおうとしていたのだろうか。

その生涯を振り返るとき、彼には、めざすべき建築のイメージとして、次の2つの方向性があったのだと思う。

ひとつは、彼の残した有名な「住宅は住むための機械である」という言葉からも読み取れるように、20世紀初頭に急速な発達を遂げた工業技術への信頼から生まれたテクノロジーへの憧れである。そこには、大量生産が始まったばかりの自動車という先行モデルがあり、それと同じように、建築においても、工業化による軽量化と量産化を推し進めることによって、快適で健康な生活空間が世界共通のものとして実現できる、という楽観的な期待が込められていた。

もう一つは、彼が、20代半ばの若い頃にめぐり歩いた東方への旅行で、無名の集落や古代遺跡の中に発見した、その土地固有のものという意味をもつ、ヴァンキュラーなものへの憧れである。それらの建物に、ル・コルビュジェは、長い歴史の中で風土や伝統に育まれてきた、変わることのない建築のエッセンスを見出し、それを新しい形で現代へと引き継ごうと考えたに違いない。

おそらく、ル・コルビュジェの中には、このような、最先端技術への期待から生まれた前進しようとする衝動と、むしろ、建築のエッセンスへどこまでもさかのぼろうとする衝動とが、いつも変わらず同居していたのだろう。白を基調とする精緻な構成の「サヴォア邸」(1931年)は前者の典型であり、コンクリートの荒々しい造形が前面に出た「ユニテ・ダビタシオン・マルセーユ」(1952年)は後者を代表している。そして、このふたつの方向性は、彼の中で、建築をその構成要素に分解し、原理的にとらえ直しながら幾何学的な抽象化によって再構築する、という明晰な方法によって見事に統合されていたのだと思う。

インドとの出会いが、ル・コルビュジェに気づかせたものとは、この前者の方向性から後者へとモダニズム建築を大きく置き放ち、より自由で悠久な存在として自立させることの意味だったのではないだろうか。

多量の雨と強烈な日差しに日々さらされる厳しい気候風土をもち、工業化とはほど遠い立ち遅れた貧しさの中にあつたインドという大地、それは、必然的に、モダニズム建築を長い人間の営みへと接続することを求めたのだ。

写真家・北田英治が写し撮ったのは、そのような、ル・コルビュジェの向き合った大地の姿であり、彼がその解放された中で、あらためてモダニズム建築の可能性を拡張しようとした格闘の痕跡である。厳しい気候風土は、その大地に根づく建築への手かかりとなり、貧しさは原初的な建築へと到達できる豊かな源泉として、ル・コルビュジェをどれほど励ましたことだろう。建築はその風土から生まれ、人々とともに長い時を生きる存在であること、そして、このことが、モダニズム建築をより自由で実在感のあるものへと高めていく道筋でもあること、北田の写真は、そのことを現代の私たちに語りかけている。

主催
後援
写真
会場構成

GALLERY A(ギャラリーエークラト)
インク大衆館
北田 英治
齊藤 祐子(SITE)・華井 裕

発行日 2006.3.17

東方旅行

1911年5月7日、シャルル＝エドゥアールは友人の美術史家で、スペインの画家グレコに関する論文を書こうとしていたオーギュスト・クリプシュタインと共に、大旅行に出発した。その後彼らは約半年をかけ、地中海の沿岸地方と東方諸国をまわった。ジュラ山脈の厳しい気候のもとで育ったシャルル＝エドゥアールは、この旅で故郷とはまったく違う風土の国々を知って衝撃を受けた。そしておそらく数年前から彼自身が強く望んでいた変化を、このとき体験したのである。「私はまだ、ひとりの人間になっていなかった。これからはじまる人生を前に、ひとつの人格となることが死ぬに求められていた」。

最初の旅行と同じく今回も、彼は10×17センチ

のクロッキー一本を持ち歩き、たくさんのメモをとり、スケッチを描いた。感想や考察も次々と書きとめていった。

「デッサンをするのは、見たものを内側に、自分自身の歴史のなかに導くためだ。ひとたび鉛筆による作品となったものは、人生のなかに入る。書かれたものは、刻まれるのだ」。

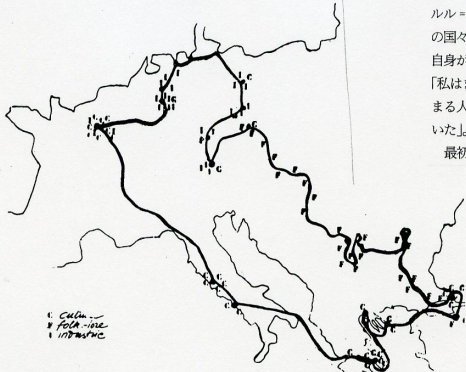
また彼は、両親へ定期的に長い手紙を送り、それらはラ・ショー＝ド＝フォンの新聞で発表された。

セルビア、ルーマニア、ブルガリアで、彼はありふれた農村の庶民的な建築に関心を持った。ギリシアではアトス半島に1週間滞在し、修道院生活と景観や建築の美しさに魅了された。トルコではモスクを知り、地中海沿岸地方の建築の簡素な形とまばゆいほどの白さに夢中になった。少年時代をジュラ山脈の薄暗い森と霧につつまれた谷で過ごしたシャルル＝エドゥアールは、この地方の明るい光にすっかり心を動かされてしまったのである。

バルテノン

この旅行で最大の見所は、アテネのアクロポリスだった。2人は数週間にわたってアテネに滞在し、未来のル・コルブジエは、来る日も来る日も「まっすぐな大理石、垂直の円柱、水平線と平行のエンタブラチュア（柱の上の構造物全体）」を見て時をすごした。

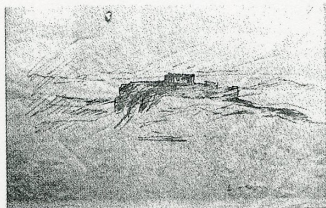
彼は、「光に照らされた立体の、巧みで正確で見事な働き」の向こうに、建築の生き生きとした力を探った。「精神の純粹な創造物、(略)感動を生む機械」であるバルテノンの美しさと力強さは、ただたんに造形的なものに由来するのではなく、精神的な次元に源がある、と彼は考えていた。

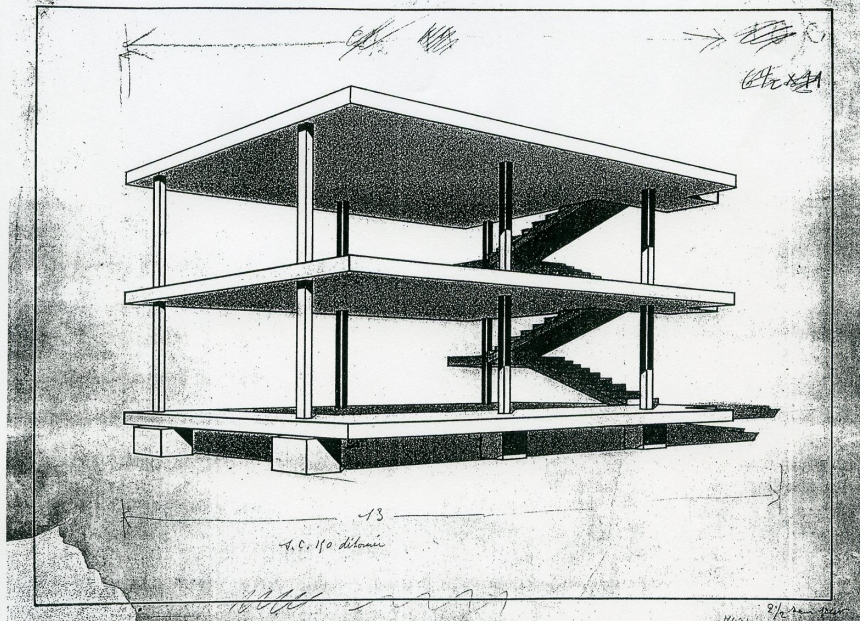


ン。

ベルリン、ドレスデン、ブラハ、ウイーン、パーツ、ブダペスト、バヤ、ジョルガボ、ベオグラード、クナシェバツ、ナイチャ、ブカレスト、チルノボ、ガブロボ、シブカ、カザンリク、アドリアノール、ロドスト、コンスタンチノーブル、ダフニ、ブルネ、アトス、サロニカ、アテネ、イテア、デルファイ、パトラス、プリンディジ、ナポリ、ローマ、ボンベイ、ローマ、フィレンツェ、ルツェルン。

旅の行程





画期的な建築システム、ドミノ

さらにシャルル＝エドゥアールは、ラ・ショー＝ド＝フォンのラ・スカラ映画館を設計し、そのほかいくつもの計画のための研究を行なった。さらに彼は、社会的な住宅問題にも関心を深めていた。戦争によってフランドル地方（ベルギー西部からフランス北端部にかけての地方）が荒廃したことを知った彼は、1914年に住宅の要素を「床」「柱」「階段」の3つに分解し、それぞれを規格化された鉄筋コンクリートのパーツとして工場で製造するという、画期的な建築システムの開発にとりかかった。このシステムは、大量の住宅を安く短期間で建てることを可能にした。

このシステムを彼は「ドミノ」と名づけた。この言葉はラテン語で「家」を意味する単語「domus」の語根「dom」と、フランス語の「革新」(innovation)の語根「ino」からつくられたものだが、組立式の住居は、^{ドミノ}牌を組みあわせて遊ぶゲームのドミノも連想させる。

ドミノ・システムの骨組み——鉄筋コンクリートの出現は、それまで長らく「壁」が担ってきたふたつの役割を分離させた。つまり、床と壁根を支えるという役割と、建物（骨組）全体をかこむという役割である。

支える役割は柱だけで可能になったため、壁は建物をかこむだけでなく、窓の大きさや、部屋と部屋の間仕切りなどを、自由に設定することができるようになった。

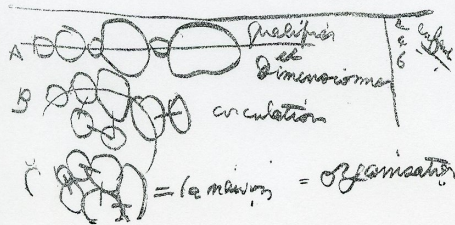
ドミノ・システムの基本は、この図のように「3枚の床板」「6本の柱」「ひとつの階段」というきわめてシンプルな要素からなっている。そして建物の正面を開放するために、柱は外壁から少し引っこんだ場所に立てられている。

『知の再発見』双書126

ル・コルビュゼ

2006年2月20日第1版第1刷発行

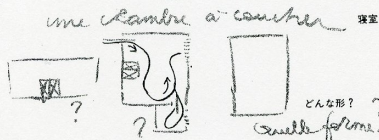
著者	ジャン・ジャンジェ
監修者	藤森照信
訳者	遠藤ゆかり
発行所	矢部敬一
発行所	株式会社 創元社



A 性格決定と寸法決定 | 2/4/6 子供
B 動線
C 住宅 = 組織規模

214

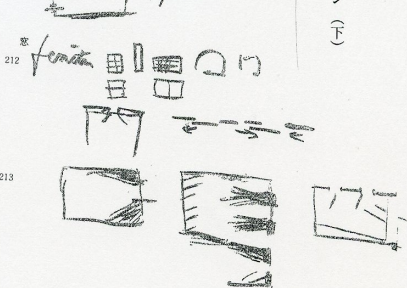
215



211

212

213



さて、次に、私の最終講演の本日になって急に決定した主題に移りましょう。もし私が建築を教えるのなら?

私は指導に当たらに際し、常により客観的なやり方で進めるでしょう。生徒たちに教えこむ努力をするのは的確な状況判断、選択、「いかに」そして「なぜ」ということに関する鋭敏な感覚であり、その内容は既にお話したものであります。彼らにこの感覚を不断に老年になるまでも涵養するように言い聞かせるのでありましょう。状況判断は事実の非常に客観的側面に則して行なわれなければなりません。ところが事実というのは流動的で変化するものです。特に今の時代においては、私は定式をまず無視してかかれと教えるでしょう。そして彼らに言うでしょう。すべては比例関係にある、と。

デッサンをしてみましょう。

若い学生に私はこう尋ねます。扉はどうするね? その大きさは?

どこに置くかね? (211)

窓はどうするかね? さてところで窓は何の役に立つのぞ? どうして窓をつけるのか本当に分かっているのかね? 分かっているのなら言ってみたまえ。もし分かっているのなら、アーチ形や、方形や、長方形等の窓をどうしてつくり出したのか説明できるはずだね (212)。理由が欲しいのだよ。それからこうつけ加えるでしょう。良く考えてこらな。今日我々は窓を必要としているかね?

部屋のどこに扉を開けるのかね? あそこではなくここに決めるのはどうしてだ? ああそうか、いくつかの案があるみたいだね? 正しいだよ。いくつかの案があるし、そのそれぞれが与える建築的感動は違うのだ。ああ、分かったね? このいろいろな案が建築の根本そのものであるということが、君が部屋に入るその入り方によって、壁に扉を置く場所によって、それぞれ別の感覚を得るのであり、扉口を開けられた壁は、だから全く違った性格を帯びることになるのだ。ここに建築があるということが分かるね。例えば、君の設計図に鉛筆で軸線を引きくことを禁じているが、この軸線なんていうものはお人好しをだますための形式なのだからね。

他にも大切なことがある。窓はどこに開けるつもりかね? 光の入って来る場所によって (213) それぞれ違った感動を受けることが分かるかね? だから、窓を設けることのできる可能性のあるものをすべて描いて、その中でどれが一番良いか言ってくれ給え。

さて、どうして君はこの部屋をこの形に描いたのかね? 成功の見込みのある他の形も探して見て、それぞれに扉と窓とを開けて見給え。さあ、この仕事のために厚いノートを買わなくては、随分多くのページが必要だろうよ (215)。

若い読者へのアドバイス……

(これは、ずっと自分自身に言いきかせているアドバイスでもある)

人の生き方はその人の心の傾注^{インテンス}がいかに形成され、また歪められてきたかの軌跡です。注意力の形成は教育の、また文化そのものまごうかたなきあらわれです。人はつねに成長します。注意力を増大させ高めるものは、人が異質なものと対して示す礼節です。新しい刺激を受けとめること、挑戦を受けることに一生懸命になってください。

検閲を警戒すること。しかし忘れないこと——社会においても個々人の生活においてももともと強力で深層にひそむ検閲は、自己検閲です。

本をたくさん読んでください。本には何か大きなものの、歓喜を呼び起こすもの、あるいは自分を深めてくれるものが詰まっています。その期待を継続すること。二度読む価値のない本は、読む価値はありません(ちなみに、これは映画についても言えることです)。

言語のストラム街に沈み込まないよう気をつけること。

言葉が指し示す具体的な、生きられた現実を想像するよう努力してください。たとえば、「戦争」というような言葉。

自分自身について、あるいは自分が欲すること、必要とすること、失望していることについて考えるのは、なるべくしないこと。自分についてはまったく、または、少なくとももてる時間のうち半分は、考えないこと。

動き回ってください。旅をすること。しばらくのあいだ、よその国に住むこと。けつして旅することをやめないこと。もしはるか遠くまで行くことができなければ、その場合は、自分自身を脱却できる場所により深く入り込んでいくこと。時間は消えていくものだとしても、場所はいつでもそこにあります。場

所が時間の埋めあわせをしてくれます。たとえば、庭は、過去はもはや重荷ではないという感情を呼び覚ましてくれます。

この社会では商業が支配的な活動に、金儲けが支配的な基準になっています。商業に対抗する、あるいは商業を意に介さない思想と実践的な行動のための場所を維持するようにしてください。みずから欲するなら、私たちひとりひとり、小さなかたちではあれ、この社会の浅薄で心が欠如したものと対して拮抗する力になることができます。

暴力を嫌悪すること。国家の虚飾と自己愛を嫌悪すること。

少なくとも一日一回は、もし自分が、旅券をもたず、冷蔵庫と電話のある住居をもたないでこの地球上に生き、飛行機に一度も乗ったことのない、膨大で圧倒的な数の人々の一員だったら、と想像してみてください。

自国の政府のあらゆる主張にきわめて懐疑的であるべきです。ほかの諸国の政府に対しても、同じように懐疑的であること。

恐れないことは難しいことです。ならば、いまよりは恐れを軽減すること。

自分の感情を押し殺すためでないかぎりは、おおいに笑うのは良いことです。

他者に庇護されたり、見下されたりする、そういう関係を許してはなりません

——女性的場合は、いまも今後も一生をつうじてそういうことがあり得ます。屈辱をはねのけること。卑劣な男は叱りつけてやりなさい。

傾注するはねのけること。注意を向ける、それがすべての核心です。眼前にあることができるかぎり自分のなかに取り込むこと。そして、自分に課された何らかの義務のしんどさに負け、みずからの生を狭めてはなりません。

傾注は生命力です。それはあなたと他者をつなぐものです。それはあなたを生き生きとさせます。いつまでも生き生きと生きてください。

良心の領界を守ってください……。

二〇〇四年二月

スーザン・ソング

良心の領界

2004年3月30日初版第1刷発行

著者

スーザン・ソング

発行所

NTT出版株式会社



01

建築をめざして
ル・コルビュゼ 著
吉阪隆正 訳
鹿島出版会 SD選書21
¥1,800

02

東方への旅
ル・コルビュゼ 著
石井勉也 訳
鹿島出版会 SD選書148
¥2,000

03

プレジジョン(上・下)
ル・コルビュゼ 著
井田安弘、芝俊子 共訳
鹿島出版会 SD選書185-186
各¥1,500



04

建築家の講義—ル・コルビュゼ
岸田省吾 監訳
櫻木直美 訳
丸善
¥1,600

05

ル・コルビュゼの手
アンドレ・ワジヤンスキー 著
白井秀和 訳
中央公論美術出版
¥1,800

06

ル・コルビュゼと私
吉阪隆正 著
勁草書房 吉阪隆正集8
¥3,200 (現在絶版)

07

ル・コルビュゼ
終わらなき挑戦の日々
ジャン・ジャンジェ 著
藤森明彦 監訳
遠藤ゆかり 訳
創元社「知の再発見」双書126
¥1,500



08

近代建築の系譜—1900年以後(上・下)
W.J.R.カーティス 著
五島朋子、漆村明・末廣香織 共訳
鹿島出版会 SDライブラリー3-4
各¥4,600 (現在絶版)



※価格は税別

Ahaus's "must-read" book list ⑤

建築という世界から 見えてくるもの

弟子たちがみた姿、
生涯と思想を描いた評伝、
歴史の中での意味、
そして本人が著した文章と残した言葉。
生涯120年のいま、改めて、あるいは一から始める
ル・コルビュゼ入門。

文・選 松隈 洋

松隈 洋 MATSUKUMA HIROSHI
京都工芸繊維大学准教授、建築史家。
1980年京都大学工学部建築学科卒業、
前川國男建築設計事務所勤務。
2000年より現職。

著書
『近代建築を記憶する』(建築資料研究社)
『ルイス・カーン 構築への意志』(丸善)
『建築家前川國男の仕事』(共編著、美術出版社)
『前川國男 現代との対話』(編著、六耀社)
『再読/日本のモダンアーキテクチャー』(共著、彰国社)
『日本建築様式史』(共著、美術出版社)
『近代日本の作家たち』(共著、学芸出版社)
『関西モダニズム再考』(共著、思文閣出版)



2007年は、近代建築の巨匠として知られるフランスの建築家、ル・コルビュジェ（1887-1965）の生誕120年という節目の年に向っている。そのもとつてか、1996年のセゾン美術館以来11年ぶりとなる大規模な展覧会が東京の森美術館で開催され、数千人が訪れたという。一方その建築作品の評価も一段と高まりつつあり、同年10月にはフランス政府が、ユネスコの世界文化遺産に彼が唯一日本に遺した「国立西洋美術館」（1959年）を含む23件の建築を一括登録すべく動き出したと報じられた。彼の名は、今や20世紀モダニズム最大のイマジネーションをもたらした印象が強烈。

日本とは、ル・コルビュジェの作品集や関連書籍がたまたま出版されている回数も珍しい。それは、彼のアトリエに学んだ前川國男、坂倉準三、吉阪隆正らが、戦前・戦後の日本近代建築をリードし、多くの建築を手がけながら、ル・コルビュジェの考えを受け継ごうとしたからに違いない。私の拙い経験でも、最晩年の前川から直接ル・コルビュジェの話を聴き、75歳を超えてなお、彼との対話を続けること、衝撃を受けた記憶がある。しかし、誰もがその建築に眼を奪われる中で、依然として、彼の根本にあった思いが正確に理解されているとはいえない。そこで、今回は、ル・コルビュジェに関する本の中から、彼の建築と思想を理解する手がかりとなるものを紹介したい。

03
04

「続いて紹介したいのが、『ジャン・ジヨ』と『建築家の訓練』ル・

01
02

まず、彼自身の著作として、『建築をめざして』と『東方への旅』を手にとつてほしい。前者は、「建築が、革命かである。革命は避けられる」という結論も象徴されるように、20世紀初頭の戦争と革命の嵐が吹き荒れる中、新しく生まれつつあった工業技術への信頼を打ち、建築に何ができるのか、が明快に述べられた36歳のデビュー作である。また、後者は、24歳の無名の青年時代に記した半年に及ぶ建築旅行の記録であり、死の直前に出版を急したが、果たせず、彼の死後に刊行された。そこには、たまたまのスペアリフと共に、長い建築の歴史から何を学ぶのか、という建築家としての初心が綴られている。

05

『一冊は戦前から20年間で仕事を共にした4人のランドレヴァンジャンスキ（1916-2004）の「ル・コルビュジェの手」である。この本には、名作『ロサンジェの礼拝堂』（1955）年の設計依頼を受ける瞬間に立ち会った経緯や、画家のグロピウスが「ユテ、ダタオチオナルマルセユ」（1952）年の現場に来た際のエピソードなどを挟みながら、彼が言う「生命を削つて建築をつくる」と実践したル・コルビュジェの姿が綴られている。また、もう一冊の戦後に師事した『ル・コルビュジェと私』（1977-1988）の「ル・コルビュジェと私」には、彼が1955年から来日した際の様子や次のように書き留められており、それを読むとき、ル・コルビュジェがそこにいるかのような錯覚を覚えるのではないだろうか。

「皆が見向きもせず捨てる物や、いやだなと思つて進めるものの中に、実は尊い宝が必ず入っている。コルはそうしたものを愛情を持つ

コルビュジェとの2冊の講演録だ。前者には、「もし私が建築を教えるとしたら？ 私は指導に当たるときに際し、常により客観的なやり方で進めるでしょう。生徒たちには教えこむ努力を進めるのは的確な状況判断と選択。『こむか』に『なぜ』という点に関する鋭敏な感覚であり、中略この感覚を不断に老年になるまでよく涵養するように言い聞かせる必要があります。』とあり、シンプルな彼の建築が、実は、地道な問いに支えられた正攻法から生み出された辛苦の結果であることが明かされる。また、後者には、「社会がその水際のために当然然と後者を最初のものが人の住まいである。風雨や雑音から人を守り、何よりも家庭の平穏を確保するための配置を一切欠かないはずがあつてこそ、人の社会は自然の理から逸脱することなく調和を保つ存在として発展する者ができる。（中略）建築とは、建築に仕える者すべてに住居への服身を要求する一つのミッションなのである。』とあり、有名な「住居は住むための機械である」という言葉に託された本心が読み取れる。どちらにも、平易な話し言葉が理解を助けてくれると思う。

07

「いすれの本も、巨匠と呼ばれるコルビュジェも二人の間違ったことを教えてくれる。さて、それでは、少し距離をおいて彼を見ようとするとき、どんな本が挙げられるだろうか、まず、手にしやすい評論として勧めたいのが、ル・コルビュジェ財団の委員長などを務めたジャン・ジャンセンの「ル・コルビュジェ」である。この本は、小さいながらも、ル・コルビュジェの生涯と建築思想のエッセンスがわかりやすく描かれては、また、巻末には、若き日のル・コルビュジェが師のプラトニに宛てた手紙なども収録されていて興味深い。

08

そして、ル・コルビュジェより広がり近代建築の歴史の中で考えるための本としては、イギリスの建築史家、W・J・R・カリエイ（1948年）の『近代建築の系譜 1900年以後』が最も適案内になると思う。彼は「真正」をキーワードに近代建築の流れを概観し、時代を越えて繰り返し立ち戻るべき存在として、ル・コルビュジェを、共感をもって描き出していく。後に、カリエイは、本格的な評論家となる「ル・コルビュジェ」理念と形態も書き下ろしており、その最後には、次のような言葉を記されている。

「ル・コルビュジェにとってモダニズムの冒険とは、理想の未来を描くと同時に根源の回復でもあった。中略 彼は、普通のものも求めて世界中の建築の中で自由に歩き回った。個性性時代、地域、様式といった偶発的なものを超越した、精神に内在する何らかの構造に根ざした根源的な形態言語を彼は発掘したかに違いない。」

ル・コルビュジェ生誕120年の現在、彼の生涯とその残した建築は、私たちがモダニズムの出発点にあつた精神を求めようとするとき、はじめてその声が聞こえてくる、そんな存在なんだと思う。建築の理想と根源が見失われ、混迷も深まる中、その声を聞くのは誰だろうか。

01

伽藍が白かったとき
ル・コルビュジエ 著
生田鮎 / 樋口清 訳
岩波文庫 / ¥900

02

都市の記憶
「場所」体験による景観デザインの手法
トニーセ 著
谷村秀彦 監訳 / 樋口昭彦 共訳
井上書院 / ¥2,500

03

人間のための街路
B・ドルフスキー 著
平良敦一 / 岡野一平 訳
鹿島出版会 / ¥3,800

04

都市の景観
G・カレン 著
北条理雄 訳
鹿島出版会 SD選書98
¥1,800

05

霧のむこうに住みたい
須賀敦子 著
河出書房新社
¥1,400

06

「都市再生」を問う
建築無制限時代の到来
五十嵐敬喜 / 小川明雄 著
若波書店 若波新書832
¥740

07

東京の果てに
平山洋介 著
NTT出版 / ¥2,400

08

ジズ・イズ・ニューヨーク
ミロスラフ・サセック 著
松浦弥太郎 訳
ブルース・インターアクションズ / ¥1,600

Ahaus's "must-read" book list ⑧

建築という世界から 見えてくるもの

人々が生き生きと暮らす街。
人間のための建築。
環境と対話し、他者と連帯できる場所。
未来の都市の姿を考えるために。
世界の都市の過去と今を巡る旅。
そんな体験をこの8冊で。

文・選 松隈 洋

松隈 洋 MATSUKUMA HIROSHI
京都工芸繊維大学教授、建築史家。
1980年京都大学工学部建築学科卒業。
前川國男建築設計事務所勤務。
2000年京都工芸繊維大学助教授、2008年10月より現職。

著書
「近代建築を記憶する」(建築資料研究社)
「ルイス・カーン 建築への意志」(共著)
「建築家前川國男の仕事」(共編著、美術出版社)
「前川國男 現代との対話」(編著、六耀社)
「再読 / 日本のモダン・アーキテクチャー」(共著、彰国社)
「日本建築様式史」(共著、美術出版社)
「近代日本の作家たち」(共著、学芸出版社)
「関西モダニズム再考」(共著、思文閣出版)

※価格は税別

二〇一六年七月十七日、トルコのイス

タンブルで開催されたユネスコ（国連教育科学文化機関）の委員会で、東京（野の国立西洋美術館を含む世界七カ国に点在するル・コルビュジエ（一八七四—一九六五年）の建築作品十七件がまとめて世界遺産に登録されることが決まった。

なぜ、鉄とガラスとコンクリートでつくられた二〇世紀のモダニズム建築が世界遺産になるのか、と不思議に思うかもしれない。世界遺産といえば、パルテノン神殿、アルハンブラ宮殿、シャルトル大聖堂といった古代遺跡や歴史の建造物に与えられるものと思われがちからだ。しかし、世界遺産評価の枠組みも変わりつつある。背景には、二十一世紀に入ってから二〇世紀の建築が次々と失われ、このままでは現代の生活環境を形づくってきたモダニズム建築の文化が歴史から消滅してしまうという危機感があるのだろう。二〇〇五年には、ユネスコの諮問機関イコモス（国際記念物遺跡会議）の中に、二〇世紀遺産に関する国際学術委員会が設置された。これまでに、アントニオ・ガウディのサグラダ・ファミリア教会やG・アスプルの森の墓地、ブルーノ・タウトほかのベルリンの近代集合住宅群やW・グロピウスのパウハウスと関連遺産群、O・ニーマイヤーの新首都ブラジリアやジョン・ウツォンのシドニー・オペラハウスなど、二〇世紀のモダニズム建築十六件が世界遺産に登録されたが、実はその四分の三は今世紀に入ってから登録なのである。

こうした動きの中、モダニズム建築を主導した最重要建築家といわれるル・コルビュジエの仕事が国を越えて認められた。そこには特別な意味が込められていると思う。

建築がそこにあることで育まれた風景、人びとの心に刻まれた記憶、建築をつくった人の思い。共感をもって次世代に伝えたい、いまも生きるモダニズム建築。

松隈洋の 近代建築 課外授業



国立西洋美術館

(1959年)

ル・コルビュジエが 日本に遺した メッセージ

文・写真 松隈洋

まつくま・ひろし 京都工芸繊維大学教授



西洋美術館の中央にある吹き抜けの19世紀ホール。

理由は、選ばれた十七件の内訳からも読み取れる。西洋美術館を含む文化施設は二件に過ぎず、宗教施設二件、工場一件、都市計画一件であり、過半の十一件が住宅と集合住宅で占められているのだ。この選定は私たちに、彼が果たそうとしたモダニズム建築の社会的使命を伝える。

ル 革命以降に急激に進行した都市への人口集中と戦争や革命によって起きた生活環境の悪化や住宅不足を解決するために、建築を工業化し、人間を中心に据えた建築のつくり方の根本的な転換を図ろうとしたのである。

独学で建築を学んだ彼は、一九三三年に出版した最初の著書「建築をめざして」に「家屋は住むための機械である」という有名な言葉を記している。しかし、建築家を志す宣言の書となるこの本に込められたものを正確に理解するには、むしろ、「建築が革命である。革命は避けられる」という同書の結語に注目する必要があると思う。ル・コルビュジエが青年期を迎えたのは、第一次世界大戦やロシア革命の時代だった。彼は、そんな苛酷な状況の中で、血を流す戦争や革命ではなく、建築によって社会を変革しようとしたのだ。

その時、彼を助めたのは、一九二一年に友人と半年にわたってヨーロッパと地中海沿岸を巡り歩いた「東方への旅」で出会った歴史的な建物と無名の集落から受けた感動だった。この旅で、ル・コルビュジエは長い歴史の中から変わらない建築のエッセンスを見つけ出す眼差しを獲得したに違いない。だからこそ、一九二九年の南米アルゼンチンでの講演録「プレジジョン」で「人は私を革命家と決め付けます。ここで

告白いたしますが、私は今までに唯一の師しか持ったことがないのです。過去という師です。そして唯一の教育しか受けたことがありません。過去から学び取るということです」と述べたのだらう。

さて、それでは西洋美術館が今回、美術館として唯一選ばれたのはなぜなのか。そこにも、彼が美術館に託そうとしたアイデアが込められている。

ル・コルビュジエにとって、美術館は生涯にわたって追求した主要なテーマだった。結果的に日本にひとつ、インドにふたつが実現しなかったが、少なくとも十以上の計画を断続的に提案し続けていた。始まりは一九二九年、国際連盟が平和を旨とする活動拠点として第一次世界大戦後目撃したムンダネウムの世界美術館にある。渦巻き状に広がる空間構成には、中央の吹き抜けに歴史を象徴するものを置き、その周りを巡りながら歴史の歩みを体感できる工夫が施されていた。このような美術館を実現することで彼が求めたのは、誰もが「過去」から大切なものを学び取り、戦争のない平和な世界を実現するための共通感覚（コモンセンス）を育むことだったのではなかろうか。この一連の美術館構想は「無限成長美術館」と名づけられ、その完成形として西洋美術館が世界遺産に選ばれたのである。さらに興味深いことに、西洋美術館には、彼が一九五五年十一月に敷地視察で来日した際に見聞した日本の伝統や風土から得たエッセンスも盛り込まれていた。そのことには残されたスケッチやメモなどから読み取れる。わずか八日間の短い日本滞在ながら、彼は上野公園の敷地を五回も調査し、弟子の坂倉準三と吉阪隆正の案内で、奈良の正倉院や東大寺、法隆寺、京都の桂離宮など



東大寺二月堂から見る大仏殿の遠景。



東京文化会館の屋上から見る西洋美術館の全景。



東大寺大仏殿の内部の柱と梁の構成。



西洋美術館2階展示室から前庭を見下ろす。

を見て回った。また、ル・コルビュジエは、前川國男の事務所や坂倉が先に実現させた神奈川県立近代美術館、吉阪の自邸にも立ち寄った。しかし、何よりも彼を感動させたのは、飛行機の上から眺めた富士山であり、複数のスケッチも残している。故郷であるスイスのラ・ショー・ド・フォン、エ芸学校時代に、恩師のレ・プラトニエから浮世絵の画集を見せられ、そこに繰り返し登場する富士山の雄大な姿に感動し、日本の自然と文化への憧れを抱いていたからだ。ル・コルビュジエは同行した吉阪に次のように語ったという。

「どうして日本人は細かいもの、細かいところに、あれだけよい感覚と洗練さを示すのに、建物の壁以上の大きい世界での造形となるとダメなのか(中略)あまりにも美しい自然のなかに溶け込みたいという気持ちもよく分かる。だが、すべてが細やかで、それがお互いに打ち消し合ってしまう。コントラストが不足している」(吉阪隆正「ル・コルビュジエの見た日本」朝日新聞)一九五五年十一月十日。

こうして、西洋美術館の中央の十九世紀ホールの象徴的な柱梁の造形には、東大寺大仏殿の柱梁のダイナミックな構成が、三角屋根のトップライトには、その壮大な瓦屋根と富士山のモチーフが盛り込まれたと推測することができる。また、屋上庭園には、目の前に広がる上野公園の緑深い風景を共有してほしいという願いが込められているのだと思う。

ル・コルビュジエが長い闘いの果てに辿りついた希望の空間、西洋美術館は、戦後復興を目指して努力していた日本人への励ましのメッセージとして遺されたのだ。

九五五年十一月四日、国立西洋美術

館の敷地視察のために初来日していたル・コルビュジエが、弟子の坂倉準三、前川國男、吉阪隆正の案内で訪れ、強い関心をもってスケッチブックに詳細なメモを記した建物がある。それが当時の面影を残しているも大切に使われている東京・麻布の国際文化会館である。折しも五カ月前の六月十一日に竣工したばかりだった。

この日、来日して三日目を迎えたル・コルビュジエは、朝一番で上野公園の敷地を視察したあと、四谷に移動して前年に竣工した前川國男の事務所であるM・Dビルに立ち寄っている。前川事務所は、前川や構造家の横山不学とともに、大高正人や鬼頭祥、木村俊彦ら若手所員たちが揃って彼を迎え入れた。三階の製図室では、やはり前年に竣工した神奈川県立図書館・音楽堂の模型を前に前川が説明する様子も写真に記録されている。

その後、昼食も兼ねて一行が向かったのが、国際文化会館だった。ル・コルビュジエのスケッチブックには「Ohashi」[Sakai + Wright + Maki + Kaw]と記されており、一階の外壁やロビーまわりに使われている大谷石に興味を抱き、それが宿泊していたフランク・ロイド・ライトの帝国ホテル（一九三三年）に範を得た坂倉と前川の合作に見えたのだらう。また、詳しく質問したのが、地下の食堂の上部にある屋上庭園の芝生の納まりのスケッチも残されている。こうしたメモからは、ル・コルビュジエが西洋美術館の設計に活かそうと目を凝らしていたことが読み取れる。その後、京都の桂離宮や奈良の東大寺にも訪れた彼は、わずかに八日間ながら精力的に日本から学ぼうとしたに違いない。もしかしたら西洋美

建築がそこにあることで育まれた風景、人びとの心に刻まれた記憶、建築をつくった人の思い。共感をもって次世代に伝えたい、いまも生きるモダンズム建築。

松隈洋の 近代建築 課外授業



17

国際文化会館

(1955年)

3人の協同設計が 実現させた都心の 小宇宙

文・写真 松隈 洋

まつくま・ひろし 京都工芸繊維大学教授



北側アプローチ外観。



視線が奥の庭園へと抜ける正面玄関。

術館には大谷石が使われ、屋上は芝生に蔽われていたかもしれない。

国際文化会館は、一九五二年八月に国際的な文化交流の拠点として、ロックフェラー財団からの巨額の援助と、川康成や大佛次郎ら文化人の呼びかけによる寄付金を元に発足する。その施設として、小川治兵衛の作庭した美しい庭園が残る旧・岩崎小彌太郎の跡地に、坂倉準三、前川國男、吉村順三による最初で最後の協同設計というユニークな方法によって建設された。建築評論家・浜口隆一の記事（『国際文化会館の協同設計は成功したか？』『新建築』一九五四年九月号）によれば、三人にコンペのような形で設計案が委嘱されたのは、財団設立直後の一九五二年十月であり、十二月には早くも三人の案が提出されている。しかし、「三案間の相異が基だし」ため、一九五三年一月に「三事務所からスタッフが出て、一個所に集まって連合事務所」がつくられ、協同設計が進められたのだという。それぞれの仕事を敬意を抱く友人同士ではあったものの、やはりひとつの建物を協同設計することには独特の困難が伴ったのだらう。丸一年をかけてようやく一九五三年末に最終案がまとまり、一九五四年三月に着工へと漕ぎつけている。

竣工時に記された「設計者の言葉」(『国際建築』一九五五年八月号)によれば、要求されたのは「明るく落ち着いた能率的な環境を作り出すこと」「日本の現代の技術と材料とで会館にふさわしい表現を与えること」だった。機能的であり、かつ日本の現代を表現した建築が求められたのだ。そこで、彼ら三人は「地形を利用して庭との連携を緊密にして開放的な空間を形造ること」「各室のもつ機能を妨げることなくしか

も有機的な連続のあるプランを作ること」に腐心したのである。

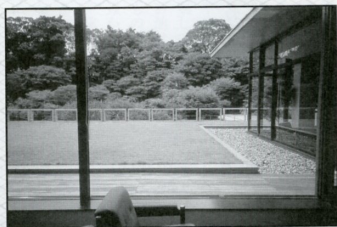
具体的には、次のような方法が採用されていく。まず、「建築材料のもつ素地を生かして木と石とコンクリート及びガラス等の使い分けによって、簡素で落ち着きのある明るい立面を造り、清新な雰囲気を与えること」。次に「階は大石の壁を廻して建物の下部をひきしめ、駐車場からの騒音と視界とを防ぎ」、窓には「日本特有の檜を建具材として選び、在来のサツユより大きな断面とスケールを採用しながら木肌のもつ親しみとコンクリート打放し面の灰色との明い調和によって、柔かな感じを出した」という。また、「二・三階の上部はプレキャストコンクリートの柱、欄及び窓合を木造構法のように組合せて、この間に建具や軽量ブロックの壁を嵌込み、陰影のある繰返しによって単一の壁面をつくっていく。こうして、建物全体に「日本の伝統的な表現を尊重して、壮大ではあるが華美に流れない清純な性格を持たせた」とのである。

と

こので、設計スタッフとしてそれは、総勢七人だったが、その後の彼らの活動を追っていくと、興味深いつながりが見えてくる。坂倉から派遣された、ロビーまわりと外部テラスの図面を描いた柴田陽三、この建物の完成後、谷口吉郎を中心に同じく協同設計で進められたホテルオークラ（一九六一年）の設計チームに実務の調整役と現場監理の立場で加わり、その経験と実績を踏み台にしてホテル建築を得意とする建築家として羽ばたいていく。また、前川の下で神奈川県立図書館・音楽堂（一九五四年）の図書館部分を担当し、その実施設計



南側庭園からの外観。



エントランスロビーから屋上庭園を見る。



ある日の結婚式の光景。



同上。左手にティーラウンジが見える。

を終えて派遣され、矩計図を描いた鬼頭梓は、この建物でも、図書館司書のパイオニアとして初代の図書室長に就任したばかりの福田なおみ（一九〇七―二〇〇七年）とやり取りしながら図書室の設計に携わった中、図書館への知識を深め、続いて国立国会図書館（一九六八）を担当した後、後に独立し、東京経済大学図書館（一九六八年）を皮切りに、日野市立中央図書館（一九七三年）など、図書館建築の専門家として活躍していくことになる。

国際文化会館は、竣工後、日本建築学会賞を受賞し、吉村や前川による増築が繰り返されながらも、文字どおり、国際的な交流の拠点としての歴史を積み重ねていく。ことに、福田が精力を傾けてレファレンス・サービスの充実に努めた成果なのだろう。長期滞在する海外の研究者にとって、図書室は長年にわたり愛される存在であり続けたのである。

しかし、二〇〇四年、施設の老朽化と経営状況の悪化を理由に、理事会は改築方針を発表、最大の危機を迎える。一時は存続が危ぶまれたが、ここを利用した海外の研究者からのメッセージも寄せられ、土壇場で取り壊しを免れて保存再生の道が拓かれていく。そして、坂倉の下にいた飯田誠造を中心とする設計チームによって、檜製の木製建具を機能アップさせて再利用するなど、既存建物に対する正確な理解ときめ細かい配慮に基づく耐震化と改修工事が施されて、二〇〇六年、再オープンし、現在へと至っている。周囲では、大規模な再開発が続く中、この都心に奇跡のように残る小宇宙のような心地よい空間が、これからここに在り続けてほしいと思う。

新しい時代の建築の理想を掲げ、モダニズム建築の先駆者となったル・コルビュジエ。その思想は、フランスから速く離れた日本にも多大な影響を与え、のちに日本独自のモダニズム建築へと実を結びことになる。前川國男、坂倉準三、吉阪隆正の三人の弟子たち、さらに丹下健三、大高正人などの作品を通して、現代へと続くその水脈をたどる。

新しい建築を求めて

ル・コルビュジエと 愛弟子たち。

二〇一六年七月十七日、トルコのイスタンブールで開かれたユネスコ（国連教育科学

文化機関）の委員会は、二十世紀に世界的なスケールで展開された「近代建築運動（Modern Movement）への顕著な貢献をした」として、フランス人建築家ル・コルビュジエ（一八八七～一九六五年）が唯一日本で手がけた東京上野の国立西洋美術館（一九五九年）を含む世界七カ国に点在する十七件の建物を、一括して世界文化遺産に登録すること

松隈 洋・文、写真

text & photographs by Hiroshi Matsukuma

まつくま ひろし 建築史家。京都工芸繊維大学教授。DOCOMOMO Japan代表。1957年兵庫県生まれ。

80年京都大学工学部建築学科卒業後、

前川國男建築設計事務所入所。

2000年京都工芸繊維大学助教授、08年同教授、博士（工学）。

文化庁国立近現代建築資料館運営委員。

著書に「ルイス・カーン——構築への意志」「近代建築を記憶する」

「坂倉準三とはだれか」

「残すべき建築 モダニズム建築は何を求めたのか」

「モダニズム建築紀行——日本の戦前期・戦後1940～50年代の建築」

「モダニズム建築紀行——日本の1960～80年代の建築」

「建築の前夜 前川國男論」、編著「前川國男 現代との対話」など。

上野公園の敷地を視察に訪れたル・コルビュジエ。

左から2番目の後ろ姿が前川國男、その右が坂倉準三で、ル・コルビュジエの右が吉阪隆正。

朝日新聞、1955年11月3日夕刊（提供・朝日新聞社）



を決議した。このニューラスが大きく報道されたとき、鉄とガラスとコンクリートでできた二十世紀のモダニズム建築が、なぜバルテノン神殿やアルハンブラ宮殿、法隆寺や姫路城などの壮麗な歴史的建造物と肩を並べる世界文化遺産になったのか、と不思議に思った人も多かったに違いない。あるいは、筆者のように、二十二世紀を迎えたことによって、遠い昔の大建築ではなく、現代を生きる私たちにとって、より身近で切実な生活環境の原型をつくり上げた二十世紀のモダニズム建築に、ようやく光が当たり始めたのか、と感じた人もいたことだろう。

折しも二〇一七年は、ル・コルビュジエ生誕百三十年の節目にあたる。同時に、ロシア革命百年の年でもある。彼が建築を志した青年期は、戦争と革命に翻弄された時代でもあった。そのような激動の二十世紀を生きた一人の建築家として、彼は建築に何を求めたのだろうか。また、彼が遺した何立西洋美術館に込められたものとは何だったのか。そして、日本の三人の弟子たち、前川國男、坂倉準三、吉阪隆正は、彼から何を学び、何を引き継ごうとしたのか。これらの問いを紐解くと、はじめて現代へと続く水脈が見えてくるのだと思う。それは、一九三五年、アメリカへ招待された際の滞在記

「伽藍が白かったとき」邦訳・岩波文庫に記された言葉に象徴される。当時のニューヨークでは、彼の構想した「輝く都市」を先行して実践するかのようになり、超高層ビルが次々と建設されていた。そんな光景を前にして、彼は、「機械文明に生きる人間に心の健康と喜びを与え」一人間のために「一身を護る場を作る」というモダニズム建築運動の出発点にあった目標を改めて述べたのである。ここでは、弟子たちへ手渡されたバトンを通して、ル・コルビュジエが日本にもたらしたものを振り返っておきたい。

理念的なテーマと使命を継承した前川國男。

一九二七年、ル・コルビュジエは、国際連盟本部の国際コンペに上位入選を果たしたものの、様式建築を信奉する審査員に失格とされたことに抗議して訴訟を起こし、前川國男（一九〇五～八六年）がアトリエに入所した二八年に、パリで展覧会を催し、自らの主張をまとめた著書「住宅と宮殿」を出版する。また、二九年には、「最小限住宅」をテーマにドイツで開催された第二回国際建築家会議（CIAM）に発表する自らの設計案の作成を、前川に担当させている。

こうして、彼の著書を読んで人間性

神奈川県立図書館・音楽堂

〔竣工年〕1954(昭和29)年〔設計〕前川國男〔施工〕大成建設〔所在地〕神奈川県横浜市西区紅葉ヶ丘9-2(★)
図書館と音楽堂を組み合わせた複合施設。書庫とホールに耐震壁を集め、明るい閲覧室とホワイエを実現させた。写真は音楽堂ホワイエ



に惹かれ、シベリア鉄道に乗って遠く日本からやつて来た十二歳の前川は、できたてのガルシユの家（一九二七年）の明晰な白い姿に感動し、建設中のサヴォア邸（一九三二年）を見学するにっぽうで、モダニズム建築を実現させるためには旧体制との闘いが避けて通れないこと、空間を構成する平面計画＝プランが方法として重要であること、第一次世界大戦で大量に不足した住宅問題の解決がモダニズム建築の大切な使命であり、そのために建築の工業化が必要であることを教えられたのである。

しかし、一九三〇年、最前線の建築思想を学んで意気揚々と帰国した前川を待ち受けていたのは、昭和恐慌下の最悪の経済状況と、フランスと同じ古い体質に支配された窮乏な建築界の現実だった。それでも、師の建築連盟本部コンペの闘いに連帯するかのようになり、三二年の東京帝室博物館コンペでは、与えられた平面図を一から作り直し、求められた「東洋趣味を基調とする日本式とすること」という外観デザインの規定を無視してル・コルビュジエ張りの応募案を提出した。当然ながらこの案は落選したと、三三年には、早くも自身の処女作となる木村産業研究所を青森県弘前市に実現させる。だが、サヴォア邸の翌年という世界的にも極めて早い時期にできたその自信作

は、雪深い厳しい自然環境を前に、漏りと雪害によって、あつけない朽ちてしまふ。

この二十七歳の挫折は、前川にル・コルビュジエの白いモダニズム建築は、そのままでは日本の気候風土に根づき、時間に耐え得るものとはならないことを痛感させたのだらう。こうして、太平洋戦争下に見えさせた大きな吹き抜けのある木造の前川國男自邸（一九四〇年）と、タイのバンコクに計画された日本文化会館のコンペの二等当選案（一九四三年）を通して、木造という制約の下にありながらも、日本の伝統的な建築に見られる建物の内部と外部が一体となって構成する空間の広がり、人の歩みに従って展開する、「一筆書き」と後に名づける独自の空間構成の方法を発見するのである。

敗戦直後には、四百二十万戸と言われた住宅不足を解消するために、バリのアトリエで担当した「最小限住宅」案を引き継ぐかのように、パネル式の木造組立住宅ブレモス（一九四六～五一年）の開発を手がけていく。一九五〇年に、建築資材統制が全面的に解除されて鉄やコンクリートが使えらるようになると、前川は、日本相互銀行の小さな支店群や本店（一九五二年）を足がかりに、モダニズム建築を成り立たせるための工業化素材や構法の開発へと積

極的に乗り出し、神奈川県立図書館・音楽堂（一九五四年）では、戦時下にかんだ空間構成の原理を初めて実際の建築として結実させる。また、六一年には、西洋美術館の対面に、師と対話するような形で東京文化会館を完成させる。その後は、むしろ彼の建築思想を相対化しつつ、木村産業研究所の苦い経験も踏まえて、日本の気候風土に適合し、時間の中で成熟してその場所に根づくことのできる日本独自の普遍的なモダニズム建築の姿を追い求めていく。そして、熊本県立美術館（一九七七年）などで、確かな骨格とタイルの外壁に包まれた透明感のある内外の空間の連続性を実現させるのである。

忠実なる一使徒として 活動した坂倉準三

一九三二年、前川の紹介で、入れ替わるようにしてアトリエに入所した坂倉準三（一九〇一～一九九九年）は、ル・コルビュジエが単体の建築から都市や農村の計画へと仕事の質を転換させる時期に遭遇する。また、それは白い抽象を求めた建築から、地域の素材を活かした建築へと移り変わる時期でもあった。前川とは異なり、東京帝国大学文学部出身で建築を現地で学んだ坂倉は、五年間におよぶアトリエでの仕事を通して、自らの任務として、ル・コ

ルビュジエの建築思想を実践するスタッフの一員だという自覚を持ったのだと思う。その活動の始まりが、パリ万国博覧会日本館（一九三七年）である。坂倉は、この建物を、歴史の偶然から急ぎ手がけることになり、アトリエの一角で師の協力を得て設計をまとめ、竣工後はグランプリを受賞する。建築家としての記念すべき国際的なデビュー作となった。しかし、三五年の帰国後は、戦争によって仕事の中断を余儀なくされてしまふ。

敗戦後、その方法を継承して竣工させたのが、神奈川県立近代美術館（一九五二年）である。この建物は、東京府立美術館に代表される戦前の荘重な様式建築とは異なり、最新の工業化材料と大谷石の自然素材を用いた、鉄骨造による抽象的な造形と巧みな空間構成によって、ごく自然に美術に親しむことのできる雰囲気と、環境と調和する新しい風景を構築してみせた。戦後の出発点を示す清新なモダニズム建築である。そして、坂倉は、続く高度経済成長の時代に、「禪く都市」の実践として、都市の交通の要となる新宿駅や渋谷駅など巨大ターミナルの計画を次々と手がけていく。

興味深いことに、新宿西口広場（一九六六年）の流麗な楕円形を描く開口部の造形に代表されるように、坂倉の



旧神奈川県立近代美術館 鎌倉館本館

【竣工年】1951(昭和26)年【設計】坂倉準三【施工】馬淵建設
 【所在地】神奈川県鎌倉市豊ノ下2-1-53(★)【公開】非公開
 環境と溶け合った豊かな空間が愛されたが、2016年1月に閉館。
 同年12月に鶴岡八幡宮に無償譲渡された。神奈川県指定重要文化財

大学セミナー・ハウス

詳細は31ページ(★)
 ル・コルビュジエの建築思想を受け継ぎ、文明論的視点を獲得した吉阪隆正。
 古代遺跡のような原始的な造形は、その集大成ともいえる



仕事には、スケールの大小にかかわらず、常に人間の身体性に届く独特の雰囲気が備わっていた。それは、ル・コルビュジエのアトリエ時代の同僚でもあったシャルロット・ペリアン(一九〇三〜一九九九年)との長い交流がもたらしたもののなかだろう。こうして、坂倉は、家具やインテリアから、洋舎やホテル、ガソリンスタンドや高速道路のトールゲート(料金所)に至るまで、それぞれ

明晰な形で総合させて全体の調和をつくり出す方法によって、都市の日常生活を支える人間の幸福のための建築をめぐしたのである。

**文明論的な視点を
受け継いだ吉阪隆正。**

戦前のル・コルビュジエの草創期に師事した前川や坂倉とは異なり、すでに早稲田大学助教授だった吉阪隆正(一九一七〜八〇年)が彼のアトリエに

学んだのは、戦後の一九五〇年からの二年間だった。もともと都市計画を学ぶために渡仏した吉阪は、偶然の出会いから彼のアトリエに通うことになったという。

このとき、ル・コルビュジエはインドのチャンディガールの都市計画やロンドン教会の設計依頼を受けて多忙な時期であり、戦前の白の時代から、荒々しい骨太なコンクリートの造形へ、その作風を大きく変化させようとしていた。吉阪は、建設中だったマルセイユの集合住宅、ユニテ・タビタシオンの現場に常駐する幸運な経験もしている。吉阪が学んだのは、物質的な存在としての建築の形がどのようにして生み出されていくのか、という創造のプロセスであり、晩年に向かうル・コルビュジエが、建築に存在感を求めようとした姿勢だったのだと思う。そこには、気候風土に逆らわず、自然を味方につけて、太陽の陽射しを避け、雨露をしのぎ、風を呼び込み、自然光により建物に象徴性を与えることによって、建築がより自由でたくましく存在に違いない、という建築観の変化があった。

今和次郎に師事し、アルビニストとして世界中を旅した吉阪は、ル・コルビュジエの眼差しの向こうに、文明論的な視点を見ようとしたのだろう。代

表作となる大学セミナー・ハウス（一九六五年）には、無名の集落のような、古代遺跡のような始原的な建築へ向き合おうとした吉阪の建築思想が感じられる。そして、それは建築家を感じた東方旅行をした若キル・コルビュジエが見ていた建築の変わらない姿とも重なるものでもあったのだろう。

丹下健三、大高正人が抱いた「憧れ」

こうして見てきたように、三人の弟子たちが直接ル・コルビュジエに学び、それぞれ独自の建築思想を展開しただけではなく、彼の影響は、さらにはかの日本人建築家たちへと広がっていく。丹下健三（一九二二—二〇〇五年）もその一人である。彼は自伝に記したように、旧制広島高校時代に、海外の建築雑誌に掲載されたル・コルビュジエのソビエトパレスコンペ案の模型写真を見て感動し、建築を志したのだという。そして、一九三八年の東京帝国大学卒業後は、前川國男の事務所に入所し、彼は坂倉準三の下へ通い詰めるほど、夜に心酔していた。だからこゝで、日中戦争下に記した二十六歳の処女論文「MICHELANGELO 頌——Le Campanile 論への序説として」（現代建築一九三九年七月号）の中で、ルネサンスの巨匠ミケランジェロに匹敵する偉大

な建築家として、「Le Campanile は今や現代の *colosse* を創りつつあるのだ（中略）唯一人、無限の進路を開きつつ、造型の公道を歩むのである」と記さずにはいられなかったのだろう。

丹下が彼の建築に強く憧れたのは、そこに、「人の心を揺さぶるような何かがある」と思わせるほどの、卑小な人間の世界を超える記念碑的な造形力を読み取ったからだ。興味深いのは、この理解が、前川や坂倉、吉阪が受け取った彼の人間性を尊重する建築思想とはまったく異なる質のものであったことである。ここにも、ル・コルビュジエの持つ多面的な魅力が現れている。それは、木造バラックとコンペという紙面上での建築しか構想できなかった戦時下の丹下にとつて、希望の光に思えたのだろう。こうして、戦後の丹下は、彼の記念碑的な造形に触発されて、広島ピースセンター（一九五二年）を実現させる。

そして、さらに若い世代の大高正人（一九三二—二〇一〇年）も、彼に憧れた学生時代を送った建築家だった。太平洋戦争下の一九四四年九月に、東京帝国大学第三工学部建築学科に入学した大高は、空襲に怯え、工場動員される中で、翻訳されたばかりのル・コルビュジエの『闇明』（二見書房、一九四二年）を貪るように読み、彼の自由闊達な空

間と市民社会の自由を建築に実現することをめざす明晰な思想に強く惹かれていく。そして、偶然にも、外来講師として招かれた前川國男と出会い、敗戦後の大学院時代から前川事務所へと通い始める。一九四九年の卒業後、正士所員となった大高は、前川の下で、木造組立住宅プロモスや、ル・コルビュジエの影響を強く受けた晴海高層アパート（一九五八年）や東京文化会館などを担当する。

独立後は、複数の建物の群造形による公共空間の創出をめざした千葉県文化会館（一九六七年）、千葉県立中央図書館（一九六八年）などから構成される千葉文化の森や、木造密集地を人工土地によって公共空間を含む集合住宅へと転換させた坂出人工土地（一九六八—六八年）、広島戦後復興の象徴として、爆心地近くにあった三千戸に上る木造バラックを解消し、共用施設を内包する屏風型に連結された三千戸の集合住宅群からなる広島基町高層アパート（一九六九—七八年）を手がけていく。

そこには、ル・コルビュジエの提案した屋上庭園やピロティが、彼が成し得なかった壮大なスケールで実現する。ル・コルビュジエが、造じた豊かな水脈。こうして、ル・コルビュジエが日本



広島ピースセンター

現・広島平和記念資料館および平和記念公園

〔竣工年〕1955(昭和30)年〔設計〕丹下健三〔施工〕大林組〔所在地〕広島県広島市中区中島町1-2(★)

〔公開〕3~7月・8時30分~18時、8月・8時30分~19時、9~11月・8時30分~18時、
12~2月・8時30分~17時(8月5、6日は~20時、入館は閉館の30分前まで) / 12月30、31日休
一般200円 / TEL082-241-4004

原爆犠牲者の鎮魂を祈って建てられた施設。ル・コルビュジェに触発され、モニュメンタルな造形表現をめざした丹下健三の出発点となった。現在は改修工事中で平成30年に全館リニューアルオープン予定

広島市営基町高層アパート

〔竣工年〕1978(昭和53)年〔設計〕大高正人〔施工〕熊谷組ほか

〔所在地〕広島県広島市中区基町(★)

戦災後にスラム化した地域の復興事業として計画された集合住宅群。
ル・コルビュジェが提案した屋上庭園やピロティも備えている



の建築家たちに与えた影響は、世代を超えて現代へと続いている。

ここで注目したいのは、その影響関係は一方的なものではなかったことである。スイスの山中の町、ラ・ショー＝ド＝フォンに育った彼は、時計の装

飾職人だった父の跡継ぎをめざして入学した地元美術学校で、恩師のシヤルル・レプラトニエから、日本の浮世絵の画集を見せられ、モチーフとして描かれていた富士山に興味を抱いたという。また、一九五〇年にアトリ

エを訪れた吉阪に、「日本はまだ近代物質文明の弊害をこうむっており、人間本来の姿をまだ保っている」、古い伝統の精神が新しい物質文明の下でどう甦ってくるかに期待している」と語っていた。だからこそ、一九五五年十一月に西洋美術館の敷地視察に一度だけ来日した際に、京都や奈良に足を運び、東大寺や正倉院などを訪ね、富士山をスケッチするなど、日本の自然や伝統的な木造文化から積極的に学び、西洋美術館の造形に活かそうとしたのだろう。その証拠に、最後の作品集に掲載された西洋美術館の竣工写真には、コンクリート打ち放しの「質の良さ」は、「日本人独特の完全な工作の腕と、素晴らしい職人的良心のたまものだ」と称賛の言葉が書き添えられた。

ル・コルビュジェが日本にもたらしたものは何か。それは、鉄とガラスとコンクリートで造られるモダニズム建築に、長い歴史のなかで変わることのない建築の価値を継承し、その上で、新しい時代に対応できる人間のための建築の原型(プロトタイプ)をつくり出す、というテーマと、それを共通の使命とすることの喜びだったのだと思う。見えにくくなったその豊かな水脈を再発見することが、現代の私たちに求められる。

20世紀モダンイズム建築を牽引したル・コルビュジエが死の直前に出版しようとした最後の著書である。地中海で海水浴中に心臓発作で亡くなる1965年8月27日のわずか11日前に、「すばらしい」「有用で、必要なものです」と、彼が信頼を寄せた若き編集者アテイ宛のメモが冒頭に掲載されている。聞き書きと恩師レプラトニエや親族への手紙、スケッチや写真等から構成された詳細な年譜と補足資料など、集められるだけの資料を盛り込んだ大著で、読みやすい内容ではない。しかし、読み進めると、建築を独学で学び、最後まで建築家の一続きの生きられた時間が鮮やかに浮かび上がってくる。

何よりも驚くのは、その生涯が巨匠へと登りつめていく順風満帆なものでは決してなく、度重なる試練と逆風の中で建築家を志した

ル・コルビュジエ みずから語る生涯

ジャン・プティ著

忍耐の人の終わりになき闘争

孤独な日々の連続であり、それが、「毎朝、何も知らない愚か者になって目を覚ます」と口癖のように語り、最晩年に至っても「私は学ぶ生徒として生きてきた」と回想するように、「控え目な規則正しさ、継続性、忍耐強さ」という職人肌の「信條」に裏打ちされていたことだ。そんな純粹さを持ち続けたからこそ、ロマン・ロランと

出会いは、サンテグジュペリの飛行機に乗り、ジャーナリストのカミユのインタビュを受け、スターリンに面会するなど、同時代人との出会いもあったのだろう。

本書は邦訳されてきた彼の著書をつなぎ合わせる太い幹にも見える。プティは、「コルビュジエとは何者であったのか?」と「われわれはつねに彼を解釈し、分類し、分



ル・コルビュジエ
みずから語る生涯

(田路貴浩・松本裕訳、中央公論美術出版、5060円)本書はル・コルビュジエの聞き書きをまとめたもので、著者は編集者として資料を収集し、完成させてきた。

析することはできる。(…)しかし、ひとつの全体をなすその仕事を分解することはできない。このひとつの全体は勇氣、粘り強さ、謙虚さによってつくられた(…)

労働と根気がル・コルビュジエの明晰で平静な力の秘密なのだ」と指摘する。そして、「コルビュの闘争は終わってはいない。その活動は始まったばかりである」という結語には胸を突かれる。

ル・コルビュジエが堅持した「住まいはすべてに先立つ」「都市は喜びをあたえ、誇りを抱かせなければならぬ」とする建築の社会的使命は、今の日本で果たされているのか、彼の後ろ姿は、このコロナ下を生きた私たちに大きな問いかけと励ましを与えてくれる。

【評】建築家

松隈 洋